

Ⅲ. 社会への回帰

学びの森の住人たち（17）

—学校でもない学習塾でもない、
〈学びの森〉という世界が投げかけるもの—

アウラ学びの森 北村真也



5. もう一つのラウンドテーブル

ラウンドテーブルでは、アウラの森の子どもたちの変容の物語が、エピソードというカタチで毎回紹介されていきます。それは、ただ単に紹介されるというだけでなく、そこに、私たちなりの視点の捻りが加わります。例えば、みんなから孤立した生徒に対して、一般的には「集団の中いかに適応させていくか?」、あるいは、「いかにその子の社会性を育てていくか?」ということが支援の焦点になるように思いますが、私たちはあえて、「一人で生きていこうとすることが、果たして問題なのだろうか?」と問いを立ててみるのです。するとそこから、「〈一人で生きていける能力〉というものもあるのではないか?」という新たな問いが生まれたりするわけです。

つまり、不登校の子どもたちへの支援を考えることが、私たち支援する側の新たな気づきになったり、学びになったりするわけです。実は、このことが支援のあり方の多様性を拓いていくためにはとても大事な過程であるということ、私たちはアウラ

の森の実践を通して知ったのです。あらかじめ、どこかに正解としての支援のカタチがあるということではなく、みんなに同じような対応をするということでもない、「その子自身にとっての支援のカタチとは何か?」を考えることの大事さを、私たちはこれまでに学んできたように思うのです。

そしてさらに、私たちはこの経験をラウンドテーブルという仕掛けを通して、他の支援者とも共有化できることを確かめてきました。ラウンドテーブルでは、それぞれの支援者が、アウラの森の子どもたちの物語をきっかけとして、今まで当たり前のようにおこなってきた自分たちの活動や自分自身の個人的な経験などを、省察的に振り返ります。そしてその過程で、新しい何かに気づいたり、その意味を見出したりして表現されていったように思います。

私たちは、このラウンドテーブルを年4回開催しながら、もう一つのラウンドテーブルとして「ラウンドテーブル運営協議会」を4回にわたって実施してきました。この協議会では、私たちアウラの森のスタッフ

と京都学園大学の川畑隆先生の他に立命館大学大学院応用人間科学研究科教授の中村正先生にも加わっていただきながら、ラウンドテーブルそのもののあり方やそのテーマ設定、あるいはそのラウンドテーブルの記録から読み取れるセッションの文脈等についての検証をおこなってきました。

G. ベイトソンが定義したコトバの中に〈メタログ〉という概念があります。この〈メタログ〉は、〈メタ・ダイアログ〉（上位の対話）から来る造語で、目の前で交わされている対話の内容が、その対話を生み出している状況（上位の対話）としても表現されていく二重性を指すコトバです。メタログが交わされる環境の中では、参加者はその対話の内容を頭で理解しつつ、その状況からも身体を通してその内容を理解することになるのです。ここでは、二重の層の学びの世界が広がることになるのです。

私は、このメタログの概念をラウンドテーブルに取り入れようと思いました。ラウンドテーブルでは、このようなメタログがあらかじめ意図されていたわけです。アウラの森の子どもたちを、アウラの森の教師たちが振り返り、今度はそれを、ラウンドテーブルに参加する支援者たちが振り返り、さらにはそのラウンドテーブルそのものを、運営委員たちが振り返り、次回のラウンドテーブルのテーマへと落とし込んでいく。まさにそこには、そういった省察的な思考を前提とした循環構造があるのです。そしてこの循環構造こそが、多様な支援のあり方の模索へとつながり、多様な実

態を表現する不登校の子どもたちのキャリア形成の支えになっていくように思うのです。



6. リアリティの中で

今年度最後のラウンドテーブルの冒頭で「イジメ」の問題が取り上げられました。

「イジメの全くない学校は、本当にいい学校なんだろうか？ 問題の起こらない学校は本当に理想の学校なんだろうか？ 私は、学校を無菌状態にしたいいけないような気がする。問題があるから、進歩がある。問題があるから、それを克服しようという気持ちが起こってくるんじゃないだろうか？」

そう問題提起をしたのは、学校の管理職の先生でした。これはとても大事な論点です。私も普段から考えているように、問題の持つ意味というものが必ずそこにあるからです。

そしてその日のラウンドテーブルでも、さまざまな議論が交わされていったわけで

すが、その最後にいじめられた経験を持ったある女性の参加者が意見を述べました。

「社会の中のさまざまな問題や葛藤が必要なのはよくわかるし、理解できます。でも、学校のイジメはどんな小さなことでもなくなってほしい。私は中学生の時にイジメにあいました。それは、本当につらい出来事でした。途中で学校へ行けなくなり、しばらく家でひきこもったのち、関東にある全寮制の学校へ転校することになりました。でも結局、そこでもうまくなじめず、また地元へ戻ってきました。私は、そんな経験を持っている当事者ですから、いじめられた時の、どうしようもない辛さがわかります。だから、たとえ学校が無菌になったとしても、私はいじめをなくしてほしい。でもそう言いつつも、仕事でいろんなアーティストに会うと彼らの多くは、その辛さを原動力にして活動をしていることもまた事実です。葛藤がまた新たな作品を生んでいくのです。だから問題や葛藤は、必要なかもしれないとも思うのです。これは簡単に答えを出せないことかもしれないと…。でも、私はやっぱりイジメはなくしてほしい。無菌でも何でもいいからなくしてほしい」

彼女は、私たちにそう語ってくれたのです。

私は彼女の語りを聞きながら、そのコトバの持つ重さを感じていました。彼女の中では、中学の時のイジメの経験に端を發す

る葛藤がいまだに続いているのです。そう簡単に答えが出せないという、彼女の途切れ途切れのコトバこそが、彼女自身の持つ「リアリティ」を表現しているのです。

私は、彼女の話聞いていて、理論や制度、あるいはシステムの中に埋没してしまっているリアリティがあるように思いました。多様化する社会をある特定のフレームで括ってしまうと、どうしてもそこにリアリティがそぎ落とされてしまいます。彼女は、かつての自分自身を「地に足がついていない状態で毎日を生きていた」と表現していましたが、彼女に限らず、生きている確かな実感が持てないまま毎日がただ通り過ぎていくような感覚を持っている人は意外と多いのかもしれない。そこにもまたリアリティがそぎ落とされた世界が広がっているのかもしれない。

物語はリアリティを運びます。子どもたちのエピソードの中のリアリティが、ラウンドテーブルに参加している支援者たちのリアリティを誘発させているのかもしれない。ここでは、それぞれのリアリティが交差していきます。

このラウンドテーブルの中で、ある一人の臨床心理士が「私は今回、臨床心理士の資格を更新しません」と宣言をされました。みんなは、驚くわけですが、彼女はその行為を通して、資格という枠の中に見失われていくリアリティを見つめていたのかもしれない。とても興味深い出来事でした。

支援者の学びの場としてスタートした、

ラウンドテーブル。そこには、自分とは違った視点で意見を述べてくれる参加者がいます。自分自身のあたりまえに問いを投げかけてくれる人がいるのです。そして、そのあたりまえを問い直すことで、自らの経験が、問い直されたあたりまえと統合されていきます。そしてその統合の過程の中で、リアリティを含んだコトバが生まれ、それが物語となって表れていくように思います。

私は、制度やシステムを否定しようとは思いません。多様な社会においては、それらを整理し有効に機能させることは、とても必要なことです。しかし、その一方で私たちの持つ豊かなリアリティの世界がそぎ落とされていこうとしていることも、また事実です。だからこそ、そのリアリティを拾い上げ、それを制度やシステムに還元させ、それらが再び更新されていくような大きな循環構造を実現することが大事だと考えています。ラウンドテーブルは、まさにこの循環構造を想起させるひとつの社会的装置だと考えられるのです。

